論 文 審 査 の 要 旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	岡本　岳史
主論文の題目 および 掲載誌･審査委員名	題　目 Changes to Indications for Tunneled Cuffed Catheter use in Hemodialysis Patients:A Single-center Experience （血液透析患者におけるカフ型カテーテルの適応の変化：単一施設における経験）
	掲載誌　Hemodialysis International 2018;22:S3-S9
	主査　力石　辰也 副査　宮入　剛 副査　丸井　祐二

［論文の要旨・価値］我が国における血液透析用 Tunneld Cuffed Catheter（TCC)の使用頻度は近年増加傾向にある。本研究は TCC 使用患者の適応・臨床的特徴について明らかにすることを目的とした。［対象・方法］当院で 2005 年 7 月から 2017 年 6 月までに TCC を挿入した 95 名・143 例を早期群 30 例 50 回（2005 年 7 月から 2011 年 6 月まで）と後期群 67 例 93 回（2011 年 7 月から 2017 年 6 月まで）にわけ、患者数の推移・年齢・性別・腎不全原疾患・糖尿病・心血管系疾患の有無・合併症・カテーテル開存期間等について検討した。［結果］後期群では高齢者が多く、(70 歳 VS77 歳 p=0.003)、心血管系疾患の既往は早期群のほうが多かった（70.0％VS 52.7%)。透析歴は後期群が長かったが有意差はなかった。後期例の方が多かったのは、TCC の適応でブリッジ症例（0％vs 20.5% p=0.047)、大腿静脈の使用（10% VS 23.7%)、腎臓内科医による挿入（56.0％ VS 87.1%)、上腕動脈表在化の併用（28.0% VS 46.2%）であった。90 日間カテーテル開存率は両群間で差はなく、全体として 56.4％であった。カテーテル関連感染症の発症率は全体で 0.462／1000 患者・日であった。［考察及び論文の価値］TCC の使用は 2010 年以降増加傾向にあり、挿入患者は高齢化していた。透析患者における TCC の使用はカテーテル関連感染症の発症は比較的少なく、概ね安全で有用な方法と考えられた。透析患者が今後ますます高齢化し、多くの合併症を伴うものと予想される中で、ブラッドアクセスとしての TCC が安全に使用できることが示されたことは腎不全医療において極めて重要な情報を発信したものと考えられる。

［審査概要］申請者による約 30 分の良くまとめられたプレゼンテーションの後、約 1 時間以上にわたる質疑応答が行われた。審査員からは、カテーテルの材質、実際のカテーテルのケアの方法、大腿静脈を使用した際の患者管理、後期群で動脈表在化が多い理由、閉塞を起こした場合の入れ替え方法、結果の解釈や先行研究との比較など、様々な質問がなされたが、申請者は的確に回答していた。発表内容や、質疑応答の様子から、申請者は腎不全医療、特に透析や TCC の管理に第一線で携わり、臨床における疑問点を症例の集積とその解析によって解決しようという意欲が感じられた。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

［研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価］申請者は臨床的な研究で常に問題となるカルテの記載の不備や、欠損値の存在にも関わらず、粘り強くデータを集めていた。また、当院における診療が途絶えた患者も、あきらめずに追跡していた点は臨床研究に極めて重要な資質を備えていると考えられれた。英語については、引用文献のうちから 1 編を指定し、その場で abstract を読み、和訳することで読解能力ありと評価した。以上より、申請者岡本岳史氏は学位授与に値すると判断した。